R-18
成人向け
堕落の木星

目次

転生（イラスト：魂神）

4～31ページ

畜舎（イラスト：黒司）

32～43ページ

蝋人形（イラスト：めかぶ）

44～55ページ

あとがき

57ページ

転生

大昔の地母神はこのような姿をしていたのであろうか。
洞窟の最深部にある開けた空間。そこにそびえ立つ巨大な女性像。だが、通常の人間と多少異なるそれは、乳房が複数存在していた。そして、人が一人分余裕で入ることのできる入り口が、女性器を象ったそれにあたる。
「ここが、そうみたいだね……」
ここ数ヶ月の間に、妖魔が異常発生していた。ほぼ毎日の如くそれに対処していたセーラー戦士達であったが、事態は収まるどころか拡大の一途を辿っていた。
大元を絶つ必要があると感じた彼女達が調査を続けた結果、十番街の郊外にある山林の奥にポッカリと口を開ける洞窟に辿り着いたのだった。
「みんなはもう先行しているみたいだね」
セーラーマーキュリーと、セーラーヴィーナスは洞窟発見の報告を行った後に他の戦士に先んじて踏み込んでいた。ジュピターとマーズ、ムーンもそれに続いたが、迷路のような洞窟の中を分散しながら進み、ジュピター一人が先に巨大な女性像の元に辿り着いていた。
「二人を待とうか……」
だが、ヴィーナスとマーキュリーが先行しているという安心感が、ジュピターの足を前へと進めた。
やけに粘着く女性像の入り口。鼻を刺激する生臭い臭い。まるで生きているかのようなこの女性像の入り口を進むジュピター。
「確かに嫌な気配がするよ……」
鼻を押さえ、グニャグニャと肉のような感触の床を踏みしめながら奥へ、奥へと進んでいく。女性像の中は、その肉のような壁や床、天井が自然と発光しているようで、難なく進むことができた。だが、その異常性があるだけに今回の事件がこの女性像と関係していることを否が応にも解らせてくれる。
（マーキュリーと、ヴィーナスは無事だろうか……）
戦士の中でも武闘派で知られるジュピターは、二人の戦士の安否を危惧していた。銀河を手中に治めんと策動していたギャラクシアの脅威から地球を守ったセーラー戦士達は一回りも二回りも大きく成長していた。
たまにダークキングダムの残党とも言える妖魔が暗躍するという事件もあったが、セーラー戦士単体で対処できるまでになっている。
今更大掛かりな妖魔の計画があったとしても、セーラー戦士が二人もいれば充分に対処はできるはずだった。
「それにしても、この臭い、なんとかならないかな……」
温度は三〇度以上はあるのではないかと思える。じんわりと汗が滲む。それ以上に、この何ともいえない生臭い臭い。これだけはジュピターも辟易しつつあった。
帰ったら入念な入浴が必要だな、等と考えながら、セーラージュピターは女性像の内部を進んでいった。
そんな独り言をボヤいている中で、周囲を異質な人影が取り囲む。
「ようやくお出ましってわけだね……」
一瞬にしてその顔は戦士のそれへと変わる。
「シュープリーム　サンダー！！」
周囲を囲む妖魔達は、その高電圧の雷によって一瞬にして黒焦

げの物体へと変わる。
「ふう……」
全く造作も無い戦闘だが、相手はおそらく数で押してくるに違いなかった。少しでもエナジーを温存する必要がある。そう自らに戒めて、ジュピターは先を急いだ。

「は、離しなさいってば！」
ピンク色の肉の照明の中で、一人の女性が犯されつつあった。
「こんな……許さないわよ！」
黄金の髪は汗でべとつき、肉の床に押し倒されて粘液が身体にこびりついている。
「キキキキッ」
一方の相手は人間ではなかった。いや、人間の形状を半分残していると表現することが適切であろうか。コウモリのような外見をした人間。
それはここ数ヶ月の街での事件でよく見る妖魔の中の一体だった。
その周囲には、様々な異形の妖魔達が、息も絶え絶えの状態で倒れ伏している。おそらくは、この犯されようとしている女性が行ったのだろう。十数体の妖魔を一人で相手にしたというだけでも驚異的だが、それ以上に妖魔の数が多かったのだろう。大きな誤算だったはずだ。
「このお……やめなさい！」
それは先行していたはずのセーラーヴィーナス。ほとんど体力も残っていない身体に叱咤し、なんとかコウモリ妖魔の戒めを解こうと試みているが、予想以上に強靭な力の前に、その試みは実を結ぶことはなかった。
戦士の象徴であるセーラースーツはボロボロにされ、片方の乳首が露出さえしていた。だが、それに恥じることはなく目の前の脅威にどう対応するかという戦士の表情は未だに失っていなかった。
さらには、今しがた離れ離れになってしまった仲間の安否も気になる。一〇〇を超える妖魔に突然襲われた二人は、八〇体を倒した所でほとんどのエナジーを使い果たし、セーラーマーキュリーは残った妖魔によって奥へと連れ去られてしまったのだ。そして、今まさに自らも貞操の危機を迎えている。
（ここままじゃ……）
この妖魔達が何をしようとしているのか、それはこの事件の被害者達を知っているヴィーナスには良く解っていた。それは女性を犯し、連れ去っていくのだ。連れ去る先はこの洞窟。であれば、連れ去られることはないだろうが、問題は前者だ。
「女の子にひどいことをしようなんて……許さないわよ！」
幸いにして、ヴィーナスの右手は掴まれていない。コウモリ妖魔はそれが如何に危険なことであるかが解っていなかった。
「いっ」
それにもまして、コウモリ妖魔の性欲は旺盛だった。女性形であるにも関わらず、その股間には巨大な男性器がそびえ立ち、無防備なヴィーナスの秘所へとそれを押し立てる。そのおぞましい感触に、ヴィーナスは顔を歪めた。
「や……」
未だに誰も受け入れたことの無い場所。それだけはなんとしてでも守ろうとヴィーナスは必死だった。そして、彼女の怒りは頂

点に達した。
「やめなさいって言ってるでしょ！」
コウモリ妖魔の強靭な力
右手を突き出し、その瞬間に指先から閃光が走った。
彼女の最も得意であり強力な技であるクレッセントビーム。それが妖魔の至近で炸裂した。
「ギィェェェェェェェ！！」
妖魔はかわす間も無く、その閃光に射抜かれ、身体に巨大な穴を開ける。
「ハァハァ……」
頭部から煙を上げて地面に倒れ伏すコウモリ妖魔を尻目に、ヴィーナスはヨロヨロと力なく立ち上がった。先を急がなければならない。その思いだけが彼女をつき動かしていた。
露出した胸を抱き、辱めを受けたことに対する不甲斐なさと羞恥心に顔を俯かせて、この醜悪な洞窟を進んでいく。
そんなヴィーナスの背後で何かが落ちた。
――ボト　ボトボトボト
しかし、疲弊して先を急ごうと集中するヴィーナスにはその音が不運にも聞こえなかった。何よりも、血管が脈打つような音が重低音で響く洞窟内である。些細な音など気にもならないのだ。普通の人間ならばそれで良いかもしれないが、しかしヴィーナスは戦士である。その気配にすら気付かない時点で戦士失格と言える。疲れなど言い訳にもならない。
「えっ」
気付いた時には、そのか細い足に、醜悪なオタマジャクシのような肉塊が数匹しがみついていた。
「きゃっ」
驚き、オタマジャクシによって右足を固定されたヴィーナスはバランスを崩してその場に倒れてしまう。
「な、なにこれ！？」
倒れたヴィーナスが見たものは、自分を目指しておぞましく身を捩らせて迫ってくる醜悪な肉塊の群れ。
「ひっ……」
さすがのセーラー戦士も、これには旋律を覚えた。なによりも、その姿が目も口も無いオタマジャクシのような姿というのがそれに拍車をかける。
「こ、こないで！」
あたふたと、慌てて立ち上がろうとするが、それらはその姿に似合わない敏捷さで次々とヴィーナスの身体へと跳びかかり、張り付いていく。
「むぐっ」
再び悲鳴をあげようとした口に侵入を試みる肉塊。さらには、耳、秘所にまで身を捩らせて、くねらせて、潜り込もうとする。
「んんんんんんんっ！！」
いつしかヴィーナスの身体は肉塊に支配されていた。身体のありとあらゆるところに張り付いたそれは、ヴィーナスの汗ばんだ肌へと張り付き、吸い付き、その美の戦士の肉体を覆い隠していく。
「ふぁっ！！　んんんんぅ！！」
大きく目を見開いて、自分が侵略されていく様をまざまざと見せつけられる。そして自分がこれからどうなるのかという恐ろしい想像さえも脳裏を過る。食われるのか、さんざんに嬲蹂されるのか。一切の抵抗が許されないこの状況で、なんとか打開策を探ろうとヴィーナスは必死だった。

「ひむぅぅ！！」
秘所へと潜り込もうとしていた肉塊が、その身の半ばまで埋めていく。そのおぞましい感触にヴィーナスは快楽など感じることはなかった。単に異物が自分の一番敏感なところへ潜り込もうとしている。
思ったよりも冷静にその事実をヴィーナスは恐怖の中で受け止めた。
なおも増える肉塊の群れに、ヴィーナスの姿はとうとう覆い隠され、外からは大きな肉の塊がモゾモゾとその場で蠢いているようにしか見えない。
いや、ただひとつ、そのヴィーナスの助けを求めるうでだけが、その肉塊から植物のように生えていた。
（だれか――）
やがて、その腕さえも覆い隠されて、肉塊は激しく蠢き始めた。中にいるヴィーナスの様子など決して窺い知ることなどできない。
そんな肉塊の動きが、ピタリと止まった。正確に言うならば、頂点だけが蠢き、あとの肉塊は地面と融合したかのように活動を止めたのだ。
グチュリ　グチュリ
なにかがこね回される音。肉塊の頂点から、透明な何かが少しずつ頭を覗かせ始める。
まるで雨のあとのタケノコのようなそれらは、周囲に無数に存在していた。ヴィーナスが埋もれてしまった場所から生えたそれも、周囲のそれと同様の姿をしていた。
「！！！！」
そのタケノコ、いや、卵の内部に飲み込まれたはずのヴィーナスの姿が見えた。卵は薄いようで強度が高いのか、ヴィーナスが内部で懸命に押したり伸ばしたりしているが一向に破れる気配が無い。
「出して！　出しなさいってば！」
誰に対して言ってるわけでもない。この卵の内部は気密性が高いようで、外にその声が漏れることはなかった。
脱出を図るヴィーナスが、ふと隣へと視線を移す。
「！？」
そう、卵に入っているのはヴィーナスだけではなかった。連れ去られ、離れ離れになってしまったはずの仲間の姿がそこにあったのだ。それも、奇妙な、まるでへその緒のような物体がヘソにくっついているではないか。
「マ、マーキュリー？」
卵の内部は液体で満たされ、その中で眠っているかのように漂う仲間の姿。生死など確認しようも無いが、時折眉をしかめている様子から、どうやら生きているらしい。
「なんてことを……」
そのマーキュリーの姿、両手が人間のものではなかったのだ。色が変色し、なにか鱗のようなもので覆われている。その姿を見てヴィーナスは知るのだった。
（最近の妖魔の発生や、いろんな人を連れ去っていたのは、こういうことだったのね……）
人間を妖魔にする。そのおぞましい計画の正体だった。
「ということは……かなりまずい状況ってわけね……」
それを知ったというだけで、現状はまるで変わりようもない。このまま、ここにいれば自分も同じ道を辿ってしまうということだ。

「なんとかしないと、このままじゃ、マーキュリーが……」
こうしている間にも、マーキュリーの姿は徐々に妖魔の姿へと変わっていっている。おそらくは妖魔化の進行はもっと早いはずだろう。その速度が遅いのは、ひとえにセーラー戦士としての力がそれを阻んでいるとしか考えられない。だが、完全に防いでいるわけではないのだ。
（エナジーが残り少ない……この状況でここを出れたとしても、マーキュリーを助けだして、この洞窟から脱出することなんて出来るの？）
何重にも待ち受ける難関。だが、今できることをやらねば、その難関に挑むことすらできないのだ。
（そうよ、やるしかないのよ、しっかりしなさいセーラーヴィーナス！）
自らへ叱咤し、この卵から抜け出ようと必殺技を放とうと力を込めた、まさにその矢先だった。
「ぐっ、うっ……ぅ」
突然の腹痛。生理現象などではないのが痛みから解る。
（お腹のなかで、何か、が……っ）
蠢いている。ゆっくりと、こねる回すように、異質なものが外へ出ようとしている。それは激しい鈍痛でヴィーナスを苦しめる。
「あ、う……ぁあぁあぁ」
必殺技、脱出どころの話ではない。腹部を押さえて前かがみになったヴィーナスはしばらくその痛みに耐えていたが、しかし、次の瞬間にその痛みはピークに達した。
「うわぁぁあぁあぁあッ！！！」
叫び声とともに、自らのヘソからピンク色の肉塊が頭を出したかと思うと、それはとてつもないスピードでウネリながら全体を顕にした。
「ひ、ぁあぁッ」
そう、それはまさにマーキュリーのヘソからも伸びていたヘその緒そのものではないか。
（こ、こんなっ）
そのヘその緒は、足場の肉塊と同化する。
そう、すべての準備は整いつつあったのだ。先ほどヴィーナスを襲ったオタマジャクシの群れ。あれはこのヘその緒の材料だったのだろう。ヴィーナスの内部に侵入し、ゆっくりとその時を待っていたのだ。おそらくはこの卵の中に対象が入ることで、初めて内部からの活動を開始する。
「あ、あぁぁぁ……」
急速に失われていく希望。そして、吸われていくエナジー。
（だ、め……このままじゃ……）
見れば足場に液体が溜まり始めている。生暖かく、人肌に近い温度のそれは、急速に水位を上げて卵の内部を満たしていく。
「い、いや……」
得体の知れない恐怖。
（妖魔になんて、そんな……）
考えたこともなかったことだった。自分は妖魔を退治する側であり、決してその反対側の立場になることなど……。
（なんとか、なんとか脱出を……）
そう考えることで、少しでも絶望を和らげようとする。
（ジュピター、マーズ、セーラームーン……お願い、助けて……）
しかし、いつしか心の中では救いを求めていた。
「いや……いやいやいやいやぁ！！」
液体は首まで迫っている。

「助けて！　いやっ！　妖魔になんてなりたくない！！」
しかし、無常にも助けなどなにもなかった。液体はそんなヴィーナスの醜態を嘲笑うかのように水位を上げていく。おそらくは、マーキュリーも同じような道を辿ったのだろう。
「ごぼっ、がぼっ！　がぼっ！」
流れこむ液体に噎せかえり、溺れ、無様にヴィーナスは藻掻いた。
外から卵を見ると、無言で暴れているヴィーナス。だが、その動きは次第に緩慢になっていき、やがてぴくりとも動かずに液体の中を漂う。ホルマリン漬けの標本のように。
見れば、マーキュリーやヴィーナスだけではない。何十、何百という卵の中で、同じように漂う妖魔や人間達の姿があった。ヴィーナスもまた、その卵の一つに過ぎない。
（あ……）
そして、ヴィーナスの意識は永遠の闇に落ちていった。

ヴィーナスが意識を喪失して三時間が経過していた。マーキュリーとヴィーナスに遅れてこの洞窟に突入したジュピターが、立ちはだかる妖魔を蹴散らしながら進んだその先。
「なんだこれは……ッ」
ずらりと並ぶ卵。完全に妖魔になっている姿や、なりかけの者。様々な中身の卵の群れ。それが何十何百とジュピターの眼前に広がっていた。どう見てもあの異様な女性像の外見からは考えられない広さだった。
「なるほど……こういうわけだったのか」

マーキュリーやヴィーナスのお陰だろう。二人よりもはるかに少ない妖魔の群れを相手にしてきただけに、ジュピターの体力には未だ充分な余裕があった。
しかし……。
「あ、あれは……！？」
そう、マーキュリーもヴィーナスも経験しなかった事態に、ジュピターは直面することになったのだ。
――グジュル　ブチャッ　ビチャッ
卵の一つから、妖魔が生まれようとしていたのだ。中身の羊水を吹き出し、その鋭利な爪で入り口を押し広げ、ゆっくりと、おぞましく這い出てくる。
「――そんなッ」
ジュピターには、その生まれ落ちた妖魔の着ている服装に見覚えがあった。羊水を滴らせ、力なく佇み、人間ではありえない長さの舌をダラリと伸ばす。生えた尻尾はユックリと左右に振られ、粘液を飛び散らせている。
「マーキュリー、なのか……？！」
自分の知っているセーラーマーキュリーからは大きくかけ離れてしまった外見、
「フシュルルルル」
息を吐いた際にでたうめき声。マーキュリーの声音のようにも聞こえるが、全く別の何かに聞こえる。もはや人間ではないことが、その声からも窺い知れた。
「そんな、どうしてなんだ！」
ジュピターにはその問いに対する答えなど、とうに解っている。だが、それでも叫ばずにはいられなかった。
「シャァァァア」

ジュピターを見たマーキュリーは、ニタリと笑ったのだ。それはかつての仲間に対するそれではなく、獲物を見つけた肉食獣の目。
「や、やめるんだマーキュリー……あ、あたしは……」
戦わなければならない。だが、ジュピターの指は金縛りにあったかのように動かない。全身から戦意が喪失している。
「キシャアアアッ！！」
獣の雄叫びを発し、生まれたばかりだというのに目にも止まらない速さで長い尻尾を振るうと、立ち尽くすジュピターの腕を起用に縛り上げた。
「うっ！」
気付いた時には遅かった。
「くっ……」
尻餅をつくジュピター。それを強引に引き寄せるマーキュリーは、女性には存在し得ないものを股間にはやしていた。上にそそり立つそれは極太の男性器。
「ひっ……」
ジュピターの眼前に突きつけられる生殖器。
「な……え、ぁ……？」
五人の仲間の中でも一際男性経験が苦手な部類であるジュピターにとって、その生殖器が例え仲間の股間から生えたものであっても、赤面せずにはいられない物体であった。
「マーキュリー……やめてくれよ……あたしは、あたしはこんなの……いやだよ！」
あくまでも普段通りに接し、マーキュリーの理性に訴えかけようとする。
「シャアアアッ」

だが、妖魔と化したマーキュリーにとっては、溜まりに溜まった性欲を抑える事などできる筈もない。そもそも、もはや思考が妖魔のそれとなっているのだ。
「やめ――」
その願いは、マーキュリーに聞き届けられることはなかった。
「んむっぅ」
強引にジュピターの口内に差し込まれる生殖器。その熱く、硬く、長いそれは、ジュピターが想像した以上の悪臭で口内を満たし、蹂躙する。
「んんんんぅ！！！」
必死に拒絶するが、頭をガッチリと腕で押さえつけられ逃れる事さえできない。歯を立てようにも、仲間のそれを傷つけることさえ躊躇われて満足に抵抗もできない。
「んっ！　ふぅ！　むぐっ！　んぅ！」
頭を前後に強引に動かされ、唇が、舌が、生殖器の表面を滑る形となり、口内全体でそれを味合わされる。
（く、苦しいっ！　臭いっ！）
快楽など全く与えられない拷問。その前後運動をひとしきり受けた後に、生殖器が蠢いたのが舌先の感触で解った。
（！？）
疑問が沸き起こった矢先に、口内に、喉に注ぎ込まれる熱い液体。
「シャアアアアアアアアアアッ！！」
射精と同時に大きな雄叫びを上げるマーキュリー。
「ごぼぉ！！　ぐ、がはっ！　けほっ　けほっ」
大きく目を見開き、喉の奥から湧き上がる嘔吐感をこらえることも出来ずにジュピターは肉の床に大量の精液を吐き出した。

「かはっ！　げほっ！　う、うぅぅ……」
グラグラと揺れる視界。射精の快楽で、マーキュリーの拘束が緩んだのか、ジュピターは床にストンと崩れ落ちた。
「あ、ああっ……」
既に戦意など喪失したジュピターは、立ち上がろうともせずに、這ったまま逃げ出そうとするも、それはマーキュリーによってあっさりと阻まれてしまう。
「やっ……もうやめて！」
強気な態度などとうに消え失せ、今やセーラースーツを身にまとうただの女となったジュピター。腰を捕まれ、獣のような姿勢で、自らの秘所に先ほど射精したばかりの生殖器が押し当てられる。
「も、もういやぁ！！」
泣き叫ぶジュピターを尻目に、マーキュリーは息を荒くさせたまま一気に突き刺した。
「ひぐっ！！」
想像を絶する痛み。誰も受け入れたことのない秘部が、規格外の太さの生殖器によって蹂躙されたのだ。
「はっ、ひっ、ぐっ」
まるで物扱いをされているような激しいピストン運動に、ジュピターの思考は追いつかない。情けない喘ぎ声を出すだけで精一杯であった。
「ぐっ、あっ、あっ、あっん」
痛みも快楽も感じない激しい波。怒涛とさえ表現しても良いその行為は、ジュピターの敗北を決定付けていた。
「キシャァァァァッ！！」
一際大きく吠えると、口内に注ぎ込まれた以上の精液が、ジュピターの秘部に注ぎ込まれた。
「あああああっ！！」
天に浮かび上がるような感覚。頭をハンマーで殴られたといっても良い衝撃。マーキュリーが達するのとほぼ同時に、ジュピターは昇天した。秘部が熱く火照り、熱い精液を受け入れ、溢れでた精液がゴボリと肉の床に零れ落ちる。
「あ……あ……ぁ」
虚ろな瞳。天井を見上げ、カエルのように無様に倒れたジュピターの姿は、敗北した戦士に相応しいものだった。否、戦うことを放棄した戦士は、もはやその時点で戦士ですらなかったのかもしれない。
しかし、それはジュピターを襲う災厄の幕開けに過ぎなかった。

ヴィーナスは生まれ変わろうとしていた。
（ダークキングダムが……私の……月の守護戦士……ちがう……だれ……）
朦朧とする意識。気が付いた時には、自分が何者かという事が全く解らなかった。二つの記憶が混在し、やがて片方の記憶が霧のように消えていく。
（ダークキングダムの……妖魔……メタリア様の……子供……）
その意識と同様に、姿も相応しいものへと変化しつつある。長く伸びた爪。それを覆う爬虫類のような鱗。二つの脚は同化しつつあり、長く、蛇のように変化している。
――ゴボゴボ
卵に満たされた羊水に気泡が浮かぶ。

大きく開けたヴィーナスの口から伸びるのは、舌先が二つに別れた蛇のような舌だった。それも長さが胸元までである。
もはやヴィーナスは人間でも月を守護するセーラー戦士でもなくなっていた。ダークキングダムの忠実なる妖魔。
（人間を……月の民を……食べ……食べ……たい）
この妖魔に与えられたものは旺盛な食欲。
ジュピターはマーキュリーによって受けた陵辱から、ようやくに立ち直ろうとしていた。その眼前。マーキュリーが生まれた卵の隣から、今まさにもう一体の妖魔が生まれ出ようとしていた。
「……う」
眼前でズルズルと這い出る異形。
「あれは……まさか……」
卵から這い出る異形は金色の髪をしていた。粘液でベッタリと濡れてはいるが、その破れてボロボロになってしまった衣装も見間違う筈もない。
「ヴィーナスまで……」
蛇のような姿の異形。上半身は人間の姿を残してはいるが、腕も、耳も、人間のものではない。
「そんな……ヴィーナス！」
尻餅をついたような姿勢で、ゆっくりと後ずさりながらジュピターは叫んだが、当の異形はまったくそれが聞こえていない。
「フシュルルルル……」
蛇が出す舌を使った声のようなものが聞こえる。
ゆっくりと上半身をもたげた蛇妖魔は、ぼんやりした表情でジュピターの方を向くと、長い舌でペロリと自身の頬に付着した粘液を舐めた。
（マーキュリーも、ヴィーナスも……妖魔に負けたっていうのか……）
下半身に力が入らない。それ以上に、仲間の変貌があまりにも衝撃的な光景だった為に、思考が上手くまとまらない。
「あ、ああ……」
そのヴィーナス――蛇妖魔が、ゆっくりとジュピターへと近付いていく。胸を抱くように、無表情に、舌を時折出し入れしながら、下半身の蛇の部分をS字にうねらせながら。
「こ、こないで……」
変貌した仲間を拒絶する。
「シュルルル……」
「ひっ！」
まさに蛇に睨まれたカエルのように怯え、恥も外聞も無く涙を流す。仲間に対して、妖魔であったとしても何もすることができない自分の無力さ。
「ヴィーナス！　ヴィーナス！　あたし達はセーラー戦士じゃないか！　そんな妖魔の身体になっても、心までは失ってないはずだろ！」
一か八か、ヴィーナスの心へ訴える叫び。
「フシュルルルル……」
舌をチロチロと出し入れし、獲物を見る蛇妖魔。ジュピターの叫びは虚しく響いただけだった。
「キシャアアアアッ！！」
ジュピターの近くに迫った蛇妖魔は、突如として上体をもたげて襲い掛かる。
「ひぃ！！」
指一本、ジュピターは動かすことが出来なかった。
その蛇の眼に睨まれ、弛緩した下半身からは小水が流れ出る。

「いやぁぁぁ！！」
男勝りで知られていたジュピターが、女の声で泣き叫んだ。それ程に蛇妖魔の姿は恐怖以外の何物でもなかったのだ。
シュルシュルと、上半身をもたげたまま、尻尾の先でジュピターを掴み上げると、そのままジュピターを人間でいう股間の位置まで引き寄せた。
「あ、ああ……」
これから自分がどうなるか、ジュピターには全く検討がつかなかった。恐怖で思考が停止しているせいでもある。
「アハァ……」
ニタリと邪悪に微笑んだ蛇妖魔は、股間をパックリと開けた。まるで蛇の口のようなそれは人間がギリギリ入れる程の広さを持っていた。
（まさ、か……）
頭上に高く掲げるようにされたジュピターは、尻尾によって、身動きが出来ない。そんなジュピターを、蛇妖魔はゆっくりと下へと下ろしていく。
下ろす先――それは奈落の口。
「い、いやだ！　いやだいやだ！！」
瞬時にこれからの自分の未来を悟ったジュピターは必死に暴れるが、強靭な蛇の力で締め付けられた身体は、全く身動きが出来ない。そして、足先から、ゆっくりと、焦らすように口の中へと収まっていく。
「やっ……お、お願いヴィーナス！　正気に……ひっ」
ブーツの上の肌に、蛇妖魔の口の内壁の粘液が触れる。生暖かく、湿っている。
「えひっ、いひっ　シャァァァァ……」

まるでジュピターを男性器に見立てて自慰行為にふけるかのように、しばらく蛇妖魔はジュピターを腰の位置まで飲み込んでは出し、飲み込んでは出しという上下運動を繰り返した。
「あ、あああぁ……やめ、てくれ……」
こぼれ落ちる涙。そんなジュピターの顔を蛇妖魔はその長い舌で舐め上げる。
「ひっ……んっ！　んぁ！！」
開いた口に、その長い舌が侵入し、ジュピターの舌へと絡み付け、絞り上げる。
「あむっ……へぁ、あっ」
奇妙な感触であった。キスも未経験なジュピターは、その舌使いに翻弄され、しばし飲み込まれていく恐怖を忘れた。だが、それもほんの束の間だった。
「あ、ああっ！！」
上下運動を繰り返していた筈が、いつの間にかジュピターの身体が肩の位置まで沈み込むようになっていた。
「や、やめて！　あたしを食べないでくれ！　ヴィーナス！　ヴィーナス！！」
だが、蛇妖魔は感極まったかのように仰け反り、その蛇の身体の伸縮運動を利用して、ゆっくりとジュピターを飲み込み始めたのだ。
「た、助けて！」
すでに首まで飲み込まれたジュピターが叫ぶ。
「アハッ　アハハハッ！！」
蛇妖魔は笑い出した。飲み込んでいるだけで、その極上のエナジーを味わうことができるのだろう。且つ、そのジュピターの身体が自分の胎内を通過していくことが――。

（気持ちいいいい！！！　美味しぃいいいいいい！！）
蛇妖魔は心の中で歓喜の声をあげた。
（人間を食べるのって、こんなにステキなことだったのぉ！！
それもただの人間じゃないわ、この月の守護戦士は極上だわ！）
すっかり妖魔と成り果てた美の戦士。もはや人間ですらなく、ダークキングダム復活の尖兵となるべき妖魔の一体。
「いやぁぁぁぁぁぁッ！！」
ジュピターの頭を押さえつけ、蛇妖魔は一気に押し込んで行く。
そして、ジュピターの視界は暗闇に閉ざされた。
蛇妖魔の口は、ゆっくりと、味わうように閉じていった。
「うわ、あ、あああああああっ！！」
声を枯らして叫ぶ。叫ぶが声は決して外に聞こえることはなかった。ジュピターにとっては暗闇の中の閉所空間。パニックを起こし、身体を動かそうとするが、棒立ちの姿勢のままそれ以外の姿勢を取ることもかなわない。
「いやっ！　出してっ！　出してぇえぇ！！　ここから出してよぉおおお！！」
徐々に奥へ、奥へと運ばれていくジュピターの身体。
「ウフ……ウフフフ……」
ジュピターを飲み込み、その飲み込んだ口を満足気にさする蛇妖魔。未だに快感が尾を引いているのか、しばらく蛇妖魔はその感覚にふけっていた。
（美味しかった……とっても美味しかったぁ）
未だ胎内に残っているジュピター。蛇妖魔の身体にできている膨らみだけが、唯一ジュピターが飲み込まれたことを示す証。
――グジュル
粘液とともに運ばれていくジュピターの身体。肉壁にもみくちゃにされ、体中がベトベトに湿る。
「誰か、誰かここから出してぇえ！！」
泣こうが叫ぼうが、もはやここから抜け出す術は残されていなかった。
「いや……いやぁ……こんな、こんなのって……」
もはや希望など残されていない。あとは自分がこのまま消化されるのか、それとも吐き出されるのか。ジュピターは前者しか考えられなかった。
（熱い……狭い……暗い……）
身体が熱を帯びているのか、それともこの密閉空間の影響か、耐え難いこの絶望的な環境に、ジュピターは次第に叫ぶことすらしなくなっていた。
「生きたままなんて……いっそ、殺して……」
意識があるまま、食われる。溶かされる。このまま消化されていくのだろう。そう思うと、もはや生への希望は諦めへと変わり、いっそのこと楽にしてほしいとさえ願う。
もはやジュピターは戦士失格とさえ言ってよかった。
「う、あ……」
ジュピター本人は気付くべくも無いが、その身体は薄い粘膜に覆われ、それが皮膜となっていた。ジュピターの身体を包みこみ、次第に形作っていく。
（なんだか、気持ち良いな……）
いつしかジュピターの意識は朦朧とし始め、恐怖心は薄らいでいる。揺り籠で眠る赤ん坊のような感覚。
（暖かい……）
瞳の光は失われ、その安らぎに身を委ねていく。この暗闇の中、時間の感覚さえ定かではなくなり、数分が経過したのか、それと

も数時間が経過したのかさえジュピターにはわからなくなっていた。
（もう、どうでもいいや……）
戦士としての責務を放棄し、ひたすらそのまどろみに身を委ねる。
「フフ……」
蛇妖魔はそんなジュピターの心境を知っているのか、その身を横たえ、満腹感を味わいながら眠りについていた。ジュピターが飲み込まれ、三時間が経過していた。

「ア、アアアアアッ」
静かだった洞窟に変化が起きていた。眠っていた蛇妖魔が、叫び声を上げている。
ジュピターを飲み込んだその蛇妖魔の口から、巨大な物体が顔をのぞかせていた。一見すると、ツチノコのように腹部を膨らませていた蛇妖魔が、何かを吐き出す――いや、生み出そうとしていた。
「キィィィシャアアアアアア！！！」
およそ人間には発することなど出来ないような声を上げ、蛇妖魔は懸命にそれを産み出す。出産の痛みは感じていないのだろう。おそらくは凄まじい快楽。
（う、いいいいい！！　気持ちいいいいいっ！！）
胎内がその物体によって擦れ、口全体がこすれることでさらなる快楽が蛇妖魔の脳を刺激する。

――ゴポッ　プシャア
次第にその姿を顕にしていく巨大な物体。それは、マーキュリーが、ヴィーナスが、多くの行方不明者が入れられていた卵だった。
なんと、この蛇妖魔はこの洞窟の機能に頼ることなく飲み込んだ対象を卵に閉じ込め、妖魔へと転生させることができるようだった。
「ウアアアアアアアッ！！」
ひとしきり大きな咆哮。と共に、巨大な卵が床へと据え付けられるように産み落とされた。
「！！！！」
突然の光。その卵の内部にジュピターの姿があった。なんと、意識を取り戻していたのだ。しかもその緒が伸び、卵が一回り小さいのかカエルのような姿勢で、突然の外界に戸惑っているのが見て取れる。
「ゴポッ、ゴボゴボっ！！」
何かを叫んでいるようだが、それは羊水に邪魔され声にもならない。
（あ、え！？　なんで！？　これは、なんなんだ一体……ッ）
先ほどまでの、戦士としての責務を放棄した事など一切忘れ、ただただ状況の変化に戸惑うばかり。ただの人間であれば、妖魔の姿で産み落とされたはずであろうが、なまじセーラー戦士としての力がそれを防いでしまった。否、遅らせたといった方が正しいのかもしれない。
（あたしは、食べられて……でも、これは……）
ジュピターが見た卵。人間を妖魔に変える入れ物。マーキュリーとヴィーナスが、その卵によって妖魔にされ、自分を襲った。

そして、今度は自分がその卵に入っている。意識がある中で、妖魔にされていく残酷な状況が、これから始まろうとしていた。
（い、いいいいいやだっ！　出してっ！　妖魔なんて絶対に……ぐっ、あっ）
どれだけ拒絶しようとも、変貌は始まりつつあったのだ。ジュピターの指先が、ゆっくりと、二つに別れ、つながっていく。グローブはその人間の構造を無視した変貌に耐え切れずにゆっくりと自分の指先の変貌によって引き裂かれていく。
「ごぼぉぁ！　ごぼごぼごぼ！！」
その激痛に叫びを上げるが、すべてそれは気泡で表現されてしまう。卵の中で、カエルのようにバタバタと無様に藻掻き、妖魔へと変貌していくセーラー戦士。
（指がっ、あたしの指がぁぁぁっ！！）
だが、それだけではない。ブーツを突き破っても、グローブを突き破っても、決定的な変化は耳、そして身体全体に及んでいた。
（身体が、スーツが……く、苦しい……）
ミチミチと音を立ててスーツが伸びていく。身体が膨らんでいるのだ。スレンダーだったジュピターの身体が、だらしなく弛む。
（あが、がぁぁぁぁッ！！）
モデルのようなジュピターの体型――その姿は、醜い豚のようになっていった。

「マーキュリーも、ヴィーナスもジュピターも……三人の気配がまるで感じられない……」
赤いハイヒールで肉の床を踏みしめ、セーラーマーズは洞窟の内部、その深部へと到達していた。待っているはずの仲間の姿が見当たらず、セーラームーンも洞窟内にはびこる妖魔との戦闘によって離れ離れとなってしまった。
「とにかく、合流しないと……嫌な予感が――」
――ピチャ　ピチャ
「……なに？」
マーズの眼前に、何かが蹲っている。その何かは、ピチャピチャと音を立て、何かをしているのだ。
「妖魔っ！」
先ほどから襲いかかってきている妖魔の一体に違いないとマーズは身構えた。が、その何かは……床を、床に溜まった液体を愛おしそうに舐めとっていた。しかも、この洞窟の生臭い臭いを打ち消すほどの体臭を放っていた。腐ったチーズと汗を混ぜたような悪臭。
「覚悟なさい妖魔ッ！　……え？」
しかし、その妖魔はただの妖魔ではなかった。何か、自分がよく知る衣装を身に纏っているのだ。薄汚れた緑を基調とした衣装。
「そんなッ！！」
ジュピターだった。だが、その姿はマーズのよく知るジュピターのものではなかった。豚のような耳と蹄。そして、一回り肉付きが良い……いや、だらしなく弛んだ丸みを帯びた肉体。
「ジュピター……どうして……」
首を振り、その仲間の変貌にマーズは驚愕した。およそ凛々しく、勝気で男勝りだったジュピターとは似ても似つかない変わり果てた姿。浅ましく媚びた笑みを浮かべ、マーズに向き直るその姿は、どうみても豚だった。
「フゴッ、フゴフゴっ」

（ああっ、月を守護する戦士のエナジーの臭い！！　犯したいっ！　犯したいっ！）
食欲、性欲が特化したその豚妖魔は、豚のようなドリルペニスを勃起させ、マーズを嫌らしく舐めるように見つめる。
マーズはその姿に嫌悪感を覚えた。いくら仲間とはいえ、これはあまりにも酷い。
「ジュピター……どうしてなの……」
マーズは、卵が人間を妖魔に変えることなど知る由もない。マーズがここへ着た時点で、全ての卵は孵っていたのだ。
「フッ　フゴゴォ！！　ブヒッ！！」
人間の言葉ではない。豚の言葉で、豚妖魔はマーズへ返答した。当然のことながら、マーズには理解することができない。
「ブ、ブヒィイイイイイイ！！」
その体型に似合わず、豚妖魔は目で追うことが出来ない瞬発力でマーズへ襲いかかった。マーズは完全に油断していた。それだけではない、かつての仲間の変貌への衝撃も影響していたに違いない。
「きゃぁ！！」
呆気無く組み伏せられたマーズは、豚妖魔の餌食となる。その悪臭が漂う唾液で顔を舐めまわされ、口へと舌を突っ込まれる。
「んんんっ！！　や……いやぁっ！！」
豚に犯される。その屈辱と恐怖がマーズを襲う。
（く、臭いっ！！　気持ち悪いっ！）
豚妖魔の全てを拒絶する。それがかつての仲間の成れの果てであっても、マーズには受け入れることなど出来なかった。
「フゴッフゴォオオッ！！」
（あああっ、いい匂い！　最高のエナジー！！）

豚妖魔は一心不乱にマーズの身体を貪った。既にセーラー戦士としての、それ以前に人間としての思考を失い、理性さえも失ってマーズの身体をその醜い身体で蹂躙するドリルペニスをマーズの股間に押し当て、一気に突き刺す。
「いっ！　ぎっ……ぁ！！」
激痛にマーズは顔を歪ませ、懸命に叫ぶことを耐えようとする。だが、それは始まりに過ぎないのだ。豚妖魔の旺盛な性欲は留まることを知らず、延々と、何十分、何時間という長い時間をかけてマーズの身体に己の欲望をぶちまけていく。
「いや、いやぁ！！」
長い時間の間に、耐えていたマーズも結局は泣き叫び、心の中で助けを求める。いくらセーラー戦士といっても、結局は女であることに変わりはない。
そして、マーズを犯す豚妖魔の身体は――どんどんと今以上に、醜い豚の姿へと変貌していった。
ダークキングダムの残滓。その中で、セーラー戦士達は妖魔に身を堕とし、その尖兵へと生まれ変わっていった。

BAD　END

#1　畜舎

今日もまた、新たな家畜が畜舎に運び込まれた。

新たな家畜候補は散々抵抗してくれたセーラー戦士の一人。

ここは人間を家畜へと作り変え、作り替えた家畜を飼育する畜舎。

抵抗していた一匹の家畜の成り損ないが、この畜舎の管理者を激しく罵倒する。

家畜の成り損ないはセーラー戦士の一人である。

もう一匹、かつてセーラー戦士だった家畜がいるが、すでに家畜としての役割に目覚め、ミルクを絞り取られてむせび泣く。

家畜候補として連れて来られたセーラー戦士は、ただただ驚愕するだけだった。

これから家畜にするに辺り、この畜舎の光景を存分に眺めさせる。

かつての仲間の姿に青ざめ、恐怖で震えているのが首輪につながれた鎖越しに解る。なんと解りやすい反応だろうか。

それにしても、家畜達の汗や糞尿、精液の臭いが入り混じり、酷い臭気を放っている。この不潔な環境にも慣れて貰う必要があるが、家畜以外にとってはこれは苦痛以外の何物でもない。さっさと放り込んで帰るに限る。

#2　品種改良

面倒な作業が一つだけある。こちらの不手際にほかならないのだが……。

家畜の成り損ないを完全な家畜にする必要がある。

家畜の分際で、未だに人間らしさを残しているようだ。この酷い臭気と衛生環境で人間らしさを主張するなど滑稽ではないか。

濃い濃度の品種改良薬液をもう一本追加すると、その家畜の成り損ないは狂ったように喚きだす。

股間から醜悪な生殖器を生やし、牛のように鳴きだすではないか。

それにしても、なんと醜い生き物だろうか。

均整も何もあったものではない乳房。牛のようなまだら模様の皮膚。

この家畜の成り損ないも、これでようやく家畜として生きていける。

その第一歩として、この家畜候補をあてがってやる事にしよう。

これは決してこちらの強制ではない。その証拠に、この家畜の成り損ないだった家畜は、今まさに腰を震わせて種付けをしたくて堪らない様子だからだ。

＃3　種付け

家畜候補を下半身を突き上げるような姿勢で台に固定する。

先ほどまで抵抗していた成り損ないも、今では立派な家畜の一匹だ。

危機としてその家畜候補に醜い生殖器を当てて狂ったように腰を動かす。

全く酷い鳴き声で種付けを行うその光景は、とても醜いものだった。

そういえば、この家畜はセーラー戦士だった。悉くダークキングダムの野望を阻み、正義を気取っていた生意気な月の守護戦士。

美の戦士……どう見ても美などは感じられない。仲間の事も忘れて真っ白な頭の中は種付けの事ばかり。品種改良の効果は充分過ぎるが、元々家畜の素質があったということだ。

一方の家畜候補は、全く声を上げようとしない。歯を食いしばり、懸命に耐えている。

それはそれで興が削がれるので、品種改良薬液を、乳房にそれぞれ注射する。

効果はすぐに現れる。すぐにこの候補も立派な家畜となるはずである。

木星を守護していたセーラー戦士も、今日でその役目を終えてもらおう。

＃4　変貌

効果はすぐに現れた。この候補はおそらくNo1の家畜になるだろう。

なによりも乳の出が良い。種付けされている最中も、相手の精子を充分に絞りとるかのような腰つかいを見せていた。

快感が凄まじいのか、延々と種付けを繰り返す"元"美の戦士の家畜。

このまま放っておいてもいいのだが、これでは折角の銘器も壊れてしまうだろう。仕方が無いので他の家畜に命じて引き剥がすことにした。

家畜化した人間は、簡単に操る事ができる。家畜として、主人に忠実であるばかりか、逆らえばどうなるのか解っているのだ。食用にしないだけ感謝して欲しいものだ。

そうこうしている間に、家畜候補の腹が膨れ上がってきている。品種改良した家畜の精液は即効性がある。さらには相手の胎内までも改造し、わずか数時間で孕むのだ。家畜に家畜を産ませ、使える家畜はダークキングダムの尖兵とすれば良いのだ。

ひとまず、家畜候補はこれから立派な家畜として生きてもらおう。

#5　出産

効果はすぐに現れた。この候補はおそらくNo1の家畜になるだろう。

早速、その膨れ上がった腹から家畜同士で混ざり合った結果の子供が誕生する。

おそらくはどちらに似ても優秀な家畜になる赤子。生まれながらにして牛のような外見をしており、ダークキングダムの戦力としても充分に期待できる。

この調子で次々と子を産ませ、繁殖させる。なに、これまでこの月の守護戦士達が奪っていった同胞の命に比べれば軽い。

子供を生んだ家畜は、我が子が愛おしいのか羊水をペロペロと舐めとり、母としての最初の愛情を与えようとしている。異形であっても子供は可愛いのだろう。

しかし、考えてみれば、ほんの数時間前までは、気丈にも我々に逆らっていた身である。それが、こうも変貌するとは思いもよらなかった。

今はしばらく、その愛情を与えさせてやることにしよう。これからは次々と機械のように産んでもらわなければならないのだから。

ダークキングダムも、決して非情ではない。

#6　堕落

何匹の家畜、いや、妖魔を産んだのだろうか。

この家畜は元々月の守護戦士だったためか、非常に肉体的に強化されていたのだろう。さらに妖魔になることで、疲れを知らない家畜となっていた。

では、今回から新たな仕事を与えることにする。

丁度、もう一人捕らえた家畜候補がいる。セーラー戦士の生き残り……。

最早地上がダークキングダムの手に堕ちてだいぶ経つ。それもこれも、この家畜達が大量の妖魔を出産したお陰と言える。セーラー戦士も、数で攻めればどうということはないのだ。だが、減ってしまった家畜は補充する必要がある。

出産しながら、別の家畜に種付けをする。そんな効率の良い方法ができるものかと検討してみたが、どうやら杞憂であったようだ。生殖器を取り付けた途端に歓喜の鳴き声を上げて、家畜候補に襲いかかるではないか。さらに、種付けをしなが子供を産み落としている。かつては我が子に愛情を注いでいたというのに、排泄物かなにかとしか思っていないようだ。

さて、あとは放っておいても問題ないだろう。餌さえ与えておけば、この家畜達はどんどんと増殖を続けるのだから。

＃1　蝋人形

館の中には無数の人形が飾られていた。

セミナー参加者の成れの果て……。そして、セーラーマーキュリーとセーラージュピターは、妖魔シャコウカイの登場でいち早く変身を行い、難を逃れた……筈であった。だが、シャコウカイの放つ蝋化液に脚を固められ、そして今まさに他の被害者同様に蝋人形とされようとしていた。

妖魔シャコウカイは、セーラーマーキュリーを固め終えると、その蝋人形を抱いてニヤリと笑ったのだ。脚だけを固められ、ただ見ていることしか出来ないセーラージュピターの眼前で、妖魔シャコウカイは言い放つ。

――これはただの人形ではない。繭なのですよ

言っている意味が飲み込めないセーラージュピターは、思いつく限りの罵倒をシャコウカイに向けて浴びせ続ける。だが、それを冷ややかに聞き流し、恐怖に歪んだセーラーマーキュリーの蝋人形を、愛おしそうに撫で続けるだけであった。今まさに、セーラーマーキュリーの蝋人形の中では、人間の身体からの変体が始まっていたのだ。

#2 誕生

セーラージュピターの眼前で、セーラーマーキュリーの蝋人形が溶けていく。

中から現れたのは、セーラーマーキュリーだった。だが、それはセーラージュピターの欲知る彼女ではなかった。

長い舌。胸に張り付いた二枚貝。蝋のような肌の色。そう、妖魔シャコウカイによく似た姿であった。

――素敵でしょう？ 彼女は生まれ変わったのです。妖魔として……。

うっとりとした表情で告げる妖魔シャコウカイ。

セーラージュピターはただその光景を眺めることしか出来ない。いかに悔しかろうと、今の彼女はあまりにも無力であった。

仲間の変貌を座視するという残酷な仕打ち。そんなセーラージュピターの反応を、妖魔シャコウカイは存分に楽しんでいた。

ドロドロに溶けた蝋人形から這い出るセーラーマーキュリーの成れの果て。

妖魔シャコウカイの眷属となり、人々を守る立場から、襲う側へと生まれ変わったセーラーマーキュリーの最初の獲物は、かつての中ｍであった。

#3 饗宴

身動きの取れないセーラージュピターに襲いかかるセーラーマーキュリー。

いや、最早彼女はセーラー戦士などではなかった。妖魔シャコウカイの眷属の一体にすぎない。蝋人形にされた他の女性達も、次々とその堅い蝋人形の繭を溶かして生まれ出てくる。これ以上無い程の絶望的な状況にも、セーラージュピターの心は折れてはいなかった。だが、それだけだった。それは戦士としての虚勢に他ならず、無力であることを打開する術など、何も持ちあわせていない。そんなセーラージュピターに、妖魔の眷属は背後からゆっくりと近付いていく。額のティアラは崩れ落ち、人間には在らざる器官、触覚が生える。

目が見えていないのか、虚空を眺めたまま、その長い舌で囚われの戦士を舐め始める。髪を、頬を、じっくりと唾液を絡ませて……。

――その唾液には、私の蝋化液と同じ効果があるのですよ。

その言葉に、セーラージュピターは驚愕した。必死に仲間の名を呼び、止めるように訴えるが、それは何の意味も無い無駄な行為であった。

#4 生き人形

セーラージュピターはされるがままとなっていた。

全身の力が抜け落ちていき、肩ががっくりと下がり、腕が上がらない。

舐められる度に、そのセーラー戦士のエナジーが吸い取られていっているようだ った。事実、その効果があるらしく、シャコウカイの眷属は、美味しそうにセーラージュピターという生き人形と化したオブジェを舐め尽くす。

全身を隈なく舐められ続け、最早セーラージュピターには虚勢を張る気力も残されていなかった。

身体を無造作に抱かれ、大きく開かれたままとなっていた口に、その妖魔の長い 舌が差し込まれる。口内まで隅々と舐められ、唾液が絡まり合い、喉を通って体内に落ちていく。

そんな行為が、数十分も続けられた。だが、セーラージュピターにはそれが数時間にも及ぶ行為に感じられる。いつまでも続くかのように思われたその行為も、いよいよ終わりに近付いているとも知らずに……。

#5 宴の終わり

妖魔の股間が隆起し、棒状の何かがそそり立つ。すでに、その妖魔の身体は人間のような張りを失い、軟体動物のようになっていた。

そんなブヨブヨの身体から現れた生殖器。いっその事、一瞬で蝋人形にして欲しかったとさえ思うようになっていたセーラージュピターは、これでようやく終わると安堵した。すでに戦士の魂さえ無い人形。外見だけでなく、心までも無機質なものと成り果てた哀れな戦士の末路。

待ちかねたその瞬間は、ひどくゆっくりとしたものだった。一気に刺し貫くことはせず、股間にあてがわれてから先端が侵入するまで数秒を要した。

セーラージュピターは、そんな焦らしにも似た行為にも関わらずむせび泣いた。ようやく楽になれる。その妖魔の精液は濃縮した蝋化液。身体の中は唾液で満たされているにも関わらず、胎内からもさらに完全な蝋人形にしようと浸食していく。

こうして、完全に挿入された生殖器から、セーラージュピターの胎内に止めどなく蝋化液が注ぎ込まれた。

#5 連鎖

二人の仲間が消えた事に不信の念を抱いた残り三人の戦士達。

館の中を限なく探す彼女達は、軟体生物のような妖魔の襲撃を受け、散り散りとなってしまった。そして、妖魔シャコウカイと対峙する事となったのは、セーラーヴィーナスであった。が、彼女も結局シャコウカイの蝋化液を防ぎきることが出来ず、身体の自由を奪われて、軟体生物――シャコウカイの眷属となった妖魔達の生贄として捧げられることになった。

その一匹、それは先程までセーラー戦士であった筈の仲間。

セーラーヴィーナスは、そのセーラー戦士の成れの果てがそうだったように、懸命にその名を叫んだ。が、当然のことながら、少しも反応せずにゾンビのようにゆっくりと近付いて来る。

目当ては人間が持つエナジー。セーラー戦士はその数倍のエナジーを周囲に放つ。それが匂いのように感じるらしい。

全身を隅々まで舐め尽くされたセーラーヴィーナスは、蝋人形へなる為に着実に犯されていった。

館には、やがて、妖魔だけが残った。

あとがき

この度はお買い上げいただき、ありがとうございました。
毎度変わらない展開ではありますが、今回は長編で１つの作品を挟んでみました。
こういった卵展開はじっくりねっとりやってみたかったわけですが、少し前半に力を入れすぎ、後半は尻すぼみになってしまったな、と後悔などしているところです。
単一キャラを時間をかけて落とすべきでしたが、私の悪い癖が出てしまったようです。

そういえば、リメイクが発表され１年。今夏にでも始まるのでは！　と期待していたアニメですが、どうも制作が順調ではない様子ですね。
来年の今頃には笑っていられるのではないか、と思っています。

今後の予定としては、まず作成中になっているフェイト本を完成させること。
そして冬には、淫獣聖戦かウェディングビーチ辺りで出したいと思っているところです。
内容は、まあ、キャラが変わっただけ……という形になりそうではありますが。

以上、どうぞ今後とも弊サークルをよろしくお願い致します。

奥付

・作品名：堕落の木星
・発行　：堕落事故調査委員会
・代表者：シューミット
・発行日：2013年8月11日
・印刷　：大陽出版株式会社
・連絡先：sch-mit@goo.jp
・Web　:http://schmitxxfallen.blog61.fc2.com/

・この物語はフィクションです。実在の人物、男体、事件とは一切関係ありません。
実際にこのような行為に及んだ場合、法律で罰せられるおそれがあります。

・本作品成人向けです。18歳未満の方の購入はお断りさせて頂きます。

・本作品をWeb上などへの無断で掲載する行為はおやめ下さい。

・ご意見、ご感想などありましたら宜しくお願い致します。